海を越えた唱和

——龍榆生氏と吉川幸次郎・小川環樹兩先生——

深澤一幸

一

中國と日本の唱和について述べる本論文のはじめは、まず中國側の當事者の龍氏から紹介することにしたい。龍榆生（一九〇二－一九六六）、本名は沐勛、別號は忍寒居士、風雨龍吟室主、江西省萬載縣の人。中國の小唄「詞」の實作者、研究者として著名で、二〇世紀の詞學大師と稱される。

若いころは、國學者の黃侃、文學評論家の陳衍に師事して詩を學び、また詞學の權威である朱祖謀から音韻學と詩詞を學んだ。前後して上海の暨南大學、廣州の中山大學、南京の中央大學などで教授をつとめた。

一九二九年から詞學の論文を書きはじめ、一九三三年には上海で「詞學季刊」を創刊し、主編をつとめた。一九四〇年には南京で汪精衞の資金援助のもと詞學研究の「同聲月刊」を創刊し、日本の諸大學とも交流した。とくに一九三四年四月、「詞學季刊」に發表した論文「研究詞學之商榷」では、詞學を正式に定義し、詞學研究の八つの方面を提示した。

一九四九年の新中國成立後は、一九五二年から一九五六年まで上海博物館圖書資料室で主任をつとめ、一九五六年からは上海音樂學院民樂系で教授をつとめた。

主要な著作としては、「東坡樂府箋」「唐宋名家詞論」「唐宋名家詞選」「近三百年名家詞選」などがあり、自作の詞集としては、「風雨龍吟室詞」「忍寒廬詞」などがある。

このような文學研究の方面、とくに「詞」學の方面で、きわめてすぐれた業績をあげた龍氏と、學術上の交流のみならず、詩詞の唱和という文藝上の交流までもつことになった吉川幸次郎（一九〇四－一九八〇）・小川環樹（一九一〇

－一九九三）の兩先生は、いうまでもなく戰後日本における中國文學研究を先頭に立って牽引された二大巨頭であり、當時は京都大學文學部中國語學文學講座の教授をつとめられていた。このお二人と龍氏とはいかにして交流を開始したのか。それを述べる前に、この交流の媒介者というべき重要な人物、今關天彭氏に登場してもらわねばなるまい。

今關天彭（一八八二－一九七〇）は、明治から昭和にかけての中國文藝研究家、漢詩人。千葉縣の生まれ。本名は壽麿。祖父の琴美、石川鴻齋、森槐南、國分青崖に師事して漢詩を、森川竹磎から塡詞を學んだ。「國民新聞」「國民雜誌」の記者となり、大正五年、森鷗外の「井澤蘭軒」・永井荷風の「每月見聞錄」にも登場する。朝鮮總督府の囑託などをへて、大正七年、三井合名本社の庇護のもとに、北京に今關研究室を設立し、中國事情の研究に從事した。中國各地を巡遊し、當時を代表する名士たち、たとえば魯迅・周作人・胡適らを歷訪し、時事を取りあつかったパンフレット三十餘種を書いた。のち昭和六年歸國するが、以後も每年中國の南北を巡遊し、昭和一七年には、汪精衞政府と重光葵駐華大使兩方の顧問をつとめたりした。

戰後は、一九四六年、南京の國民黨政府の顧問をつとめ、昭和二六年、東京で漢詩雜誌「雅友」を創刊。八八歲で死去。著作に「東洋畫論集成」上下（讀畫書院、大正五年七月）、「支那戲曲集」（東方時論社、大正六年一月）、「近代支那の學藝」（民友社、昭和六年一二月）、「天彭詩集」十五卷七册（雅友社、昭和四六年）などがある。

さて、最近惜しくも夭逝された篤實な學者張暉氏の力作「龍榆生先生年譜」（學林出版社、二〇〇一年五月）の卷二、一九三〇（民國十九）年、龍氏二十九歲、の十二月十五日には、況周頤・王鵬運・朱祖謀・鄭文焯を論じた「「清季四大詞人」一文脫稿」とあり、その著の「小引」を引いていう、

去年、彊村先生（朱祖謀）は日本人今關天彭君が著わす所の「清代及び現代の詩餘駢文界」一册を示さる。受讀すること旣に竟（おわ）り、因りて念（おも）うらく、詞は今日に至り、漸く衰微に就く。偶たま現代の詞人を以って、

諸學士に詢うに、甚はだしきは或いは其の姓氏を擧ぐる能わず。彼の東邦の學者は、猶お能く吾が國の詞壇に注意するに、而るに吾れは乃ち茫として知る所無し。之を言いて愧を滋さざらん歟。

龍氏は當時、上海の暨南大學國文系の教師。そのかれが讀んで刺激をうけた「清代及び現代の詩餘駢文界」は、大正一五年、北京の今關研究室から出版されたパンフレットであり、のち「近代支那の學藝」にも收錄された。「詩餘」とは、「詞」の別名である。

そしてこれから一一年後の一九四一年の春、清明節の日に、四十歳の龍氏は六十歳の今關氏と南京で出會ったようである。當時、龍氏は汪精衞の南京國民政府の立法院の立法委員、かつ中央大學教授だった。最近になってやっと出版された龍氏自作の詩詞の集成「忍寒詩詞歌詞集」（復旦大學出版社、二〇一二年一二月）の「忍寒廬吟稿」一九四一年に收める「八聲甘州・白下に今關天彭に遇い、雲起軒詞の韻を用いて賦贈す」詞を引こう。「白下」は南京、「雲起軒詞」は、清末の詞人・學者・思想家たる文廷式の詞集である。龍氏は精力的にかれの詞を整理し、のちに「雲起軒詞鈔序附語」「雲起軒詞補遺」などを「同聲月刊」で發表している。

正茫茫
墮絮送春歸
悽吟和流泉
乍天風吹到
風流祕監
自外烽煙
看睹乾坤未了

正に茫茫たり
墮絮は春の歸るを送り
悽吟は流泉に和す
乍ち天風吹き到り
風流なる祕監
外自りの烽煙
乾坤を看睹すること未まだ了らざるに

勝敗兩潸然
領取無言意
知向誰邊

勝敗　兩つながら潸然たり
領取す　無言の意
知んぬ誰が邊に向いてせん

相對休嗟沈陸

相い對して沈陸を嗟くを休めよ

賸蘭成老淚　賸(あま)つさえ蘭成の老淚は
滲入危絃　危絃に滲み入る
又江南草長　又た江南には草長じ
回首亂鶯天　首(こうべ)を回(めぐ)らす　亂鶯の天
待爲霖　霖を爲すを待たん
洗兵須早　兵を洗うは須からく早かるべし
願謳歌　願わくは謳歌し
各趁太平年　各おの太平の年を趁(お)わん
同音感　同音に感じ
聽壎篪奏　壎篪の奏を聽き
忘却華顚　華顚を忘却せん

「祕監」は唐に渡り祕書監をつとめた阿倍仲麻呂、今關氏をたとえる。

「沈陸」は、「陸沈」で、中國の國土が日本軍の戰火の下にあることをいおう。「蘭成」は北周の亡國の詩人庾信だが、かれに喩えられて「老淚」を流すのは、日本を離れて南京に滯在する今關氏だろう。

「爲霖」は、旱魃を救う三日間の雨降りで、「書經」說命篇上に「若(も)し歲が大旱ならば、汝を用いて霖雨と爲さん」とある。「洗兵」は、武器を洗うことで、抗日戰爭の終結をいう。この兩者をつなぐものとして、唐の錢起の「王相公が范陽に赴くを送る」詩に「賑を受くれば乃ち鼎を調え、霖を爲さば更に兵を洗う」とある。

「同音」は、「詩經」小雅「鼓鐘」に「鐘を鼓せば欽欽、瑟を鼓し琴を鼓し、笙磬は音を同じゅうす」とあり、鄭玄の箋に「同音なる者は、堂上堂下、八音克(よ)く諧う」とある。「壎篪」は土笛と竹笛で、「詩經」小雅「何人斯」に「伯氏は壎を吹き、仲氏は篪を吹く」とあり、兄弟の仲良さをたとえる。

この一九四一年の年末には、南京の國民政府の顧問となった今關氏が、立法委員かつ中央大學教授たる龍氏の、陳鍾凡氏の私宅の一階を間借りした陰陽營二十三號の居宅を訪れたようで、龍氏の七律「日本の詩人今關天彭は枉げて寓廬に過ぎられ、賦贈す」（「歌詞集」「忍寒廬吟稿」一九四一年）にはいう、

印心還藉手爲口　心に印するに還た手を藉りて口と爲し
相對無言情轉親　相い對して言無きも情は轉た親し
共喜衣冠仍舊俗　共に衣冠の舊俗に仍るを喜び
擬迴氷雪唱陽春　氷雪を迴らして陽春を唱わんと擬す
新詩合向閒中老　新詩は合に閒中に向いて老ゆべく
逸響聽從域外眞　逸響は域外從り眞なるに聽さん
我欲三山尋樂譜　我れは三山に樂譜を尋ねんと欲し
李唐聲教愧重陳　李唐の聲教　重ねて陳ぶを愧ず

第一句には「東坡に「手を以って口と爲す」の說有り、筆談を謂う也」と自注するが、今關氏は中國語はしゃべれなかったらしい。

第四句の「氷雪」は、この年末、つまり冬の寒さをいおう。「陽春」は、世俗を離れた高雅な歌で、戰國の宋玉の「楚王の問に對す」に「客に郢中に歌う者有り。其の始めは下里・巴人と曰い、國中に屬して和する者は數千人。……其の陽春・白雪を爲せば、國中に屬して和する者は數十人に過ぎず」とある。

第五・六句は、新詩は閑な生活のなかで成熟するでしょう、すばらしい調べは「域外」日本に殘された眞實からくるにまかせましょう、といった意味か。いずれも今關氏の詩作をほめていよう。「閒中に向いて老ゆ」は、宋の陸游の「小園の新晴」詩の「此の身は定めて閑中に向いて老ゆるも、若し休休たるに比ぶれば却って未まだ同じからず」による。

「三山」東海上の三神山は、「域外」とともに日本をいおう。そこに尋ねようとする「樂譜」は、奈良に殘された雅樂を指し、それは「李唐」唐朝の「聲教」音樂をいまに傳えるものだった。

そしてこの詩に今關氏が唱和した「楡生の贈られし韻に次して却寄す」詩（「天彭詩集」卷十では「楡生詞長」「詩韻」となっている）が翌一九四二年二月一五日刊行の「同聲月刊」二卷二號に揭載された。それをあげよう。

古譜新聲各有因　古譜　新聲　各おの因有り
筆傳胸臆語何親　筆もて胸臆を傳え　語は何ぞ親しき
去年相識清明節　去年　相い識る　清明節
一醉同迎白下春　一醉　同に迎う　白下の春
海客難勝毛羽老　海客は勝え難し　毛羽の老ゆるに
騷人逾見性情眞　騷人は逾いよ見わす　性情の眞なるを
唱酬成卷從今始　唱酬の卷と成るは今從り始まる
擬續村詞朱與陳　續けんと擬す　村詞　朱と陳と

「海客」は日本からやって來た今關氏本人、「騷人」は「離騷」を作った屈原のようにすぐれた詩人龍氏。末二句の「村詞」は「彊村詞」か。朱祖謀の「彊村詞」四卷は光緒三十一年に刊行。それは「朱」朱祖謀と「陳」陳三立との協力による成果ともいえる。陳氏は龍氏が朱氏の遺した業績を「彊村遺書」としてまとめるのに協力し、朱氏の墓誌銘も撰述した。そして龍氏はこの二老の遺墨を保持していた。今からあなたと私は詩の唱酬をはじめ、恩師の朱氏と陳氏のようなやりとりを續けていきましょう、というのだろう。たとえば、一九二六年、陳氏が朱氏におくった「彊邨同年の七十を壽ぐ」（「散原精舍詩別集」）詩には「終古の精靈は點筆に歸し、兩朝の出入は霑巾に付す」といった句がある。

なお、のちの「詩集」では第三句の「識」を「遇」に改め、第五・六句は、

客久將忘瀛海遠　客久しくして將に瀛海の遠きを忘れんとし
旨深倍覺性情眞　旨深くして倍ます性情の眞なるを覺ゆ

と改めている。

この年の夏、龍氏は「伏中、橋西草堂に集い、主人は新什を出示され、次韻して報い奉つり、兼ねて天彭に簡す」（「詩歌集」「忍寒廬吟稿」一九四二年）と題する七律を作り、

軍人にして詩人たる主人の高情をうたいあげた。「橋西草堂」は南京の三歩兩橋にあり、その「主人」は李宣倜（一八八〇－一九六一）、原名は汰書、字は釋堪など、號は蘇堂、福建省侯官の人。龍氏は「太疎」とよんでいる。當時は汪精衞の南京國民政府で印鑄局局長をつとめていた。このころは汪精衞が經費を出し、毎週李氏の草堂に南京・上海一帶の文人を集め、宴會雅集を開き、「星飯會」と呼ばれた。この會には龍氏はもちろんのこと、時には今關氏も參加したようである。その七律は、

壺中自闢小蓬瀛　壺中　自ずと闢く　小蓬瀛
射虎將軍共識名　射虎將軍は共に名を識る
揮麈談玄忘坐久　麈を揮い玄を談り　坐すること久しきを忘れ
啓窓延綠覺涼生　窓を啓き綠を延き　涼しさの生ずるを覺ゆ
春華摛藻從賓戲　春華　藻を摛きて賓戲に從い
寶劍論交有客卿　寶劍　交を論じて客卿有り
泯盡機心均物我　機心を泯し盡くして物と我とを均しくし
鷗波起處看詩成　鷗波の起くる處　詩の成るを看ん

「射虎將軍」は、漢の勇猛な將軍李廣で、主人の李宣倜をたとえる。李氏はもともと軍人で、民國時代は大總統侍從武官・軍事幕僚などをつとめ、將軍府文威將軍、陸軍中將などに昇進した。

「賓戲」は、漢の班固の「賓の戲れしに答う」、賓の質問に主人が答えるスタイルの文章にもとづき、主人の李氏の賓客たちとの詩の應酬をいおう。その文中に「辯を馳すること濤波の如く、藻を摛くこと春華の如しと雖も、猶お殿最に益無き也」とある。

「寶劍論交」は吳の季札と徐國の君主の故事か。「史記・吳太伯世家」には「季札の初め使いするや、北のかた徐君に過る。徐君は季札の劍を好むも、口に敢えて言わ弗。季札は心に之を知るも、上國に使いするが爲に、未だ獻ぜず。還りて徐に至れば、徐君は已に死す。是こに於て乃

ち其の寶劍を解き、之を徐君の冢樹に繫けて去る」とある。民國の莊一拂が畫家蒲華をうたった「南國壁聯雜詠」にも「四海に交を論じて寶劍を懷い、一生　首を低れて梅花を拜す」とある。「客卿」は季札で、日本からの客、今關氏をいうか。

「鷗波」は鷗の戲れる波で、悠々自適な隱居生活をいい、陸游の「雜興」詩に「意を得たり鷗波の外、歸るを忘る雁浦の邊」とある。

この會には今關氏も參加していたようで、「七夕、太疎樓の清集、鶴亭叟の韻に次す」（「天彭詩集」卷十）をあげよう。「鶴亭叟」は、當時上海に住んでいた太炎文學院教授の冒廣生で、「小三吾亭詩文集」がある。

丈人到處有吟窩　丈人の到る處　吟窩有り
想見風流應接多　想見す　風流　應接の多きを
天上幽期長不誤　天上の幽期は長く誤らず
江南勝會好相過　江南の勝會は相い過ぎるに好ろし
午涼生座琴鳴壁　午涼は座に生じ琴は壁に鳴り
荷氣浮庭蜂出窠　荷氣は庭に浮かび蜂は窠を出づ
萬事隨緣須盡醉　萬事は緣に隨う　須からく醉いを盡くすべし
閒情何必羨星河　閒情　何んぞ必らずしも星河を羨まん

また今關氏には「古重陽、橋西草堂の清集、余は東歸して、與かるを獲ず。太疎は代りて韻字を拈る。十二月、重ねて江南に游び、乃ち勉強して補作すと云う」（「天彭詩集」卷十）といった詩もある。

さて、さきの龍氏「伏中」の詩を見た今關氏は、それに次韻した「再たび韻に疊し、龍君榆生に寄す」（「天彭詩集」卷十）で、とくに中間の四句で、龍氏の詩風をうたう。

飄萍欣我度滄瀛　飄萍　欣ぶ　我が滄瀛を度るを
楚尾吳頭夙識名　楚尾吳頭　夙に名を識る
詩派江西傳正脈　詩派は江西　正脈を傳え
禪心月下悟前生　禪心は月下　前生を悟る

好收殘闕興新樂　好く殘闕を收めて新樂を興し
聊際艱虞試巨卿　聊か艱虞に際して巨卿を試す
一笑錦囊空有句　一笑す　錦囊に空しく句有り
匡山銷夏亦難成　匡山に夏を銷すは亦た成し難きを

第一・二句は、「飄萍」定めなく漂う浮き草のような「我」わたしは「滄瀛」大海原を渡って中國にきたのがうれしい、この南京で早くからあなたの名聲を知ったのだから、といった意味か。「楚尾吳頭」は朱子の「鉛山立春」詩に「雪は山腰洞口を擁し、春は楚尾吳頭に回る」とあり、長江の中下流一帯を指す。ここは南京をいうか。

第三・四句は、あなたの詩は江西詩派の正統を傳え、前世は詩僧だったと悟った唐の白居易のよう。白居易の「詩を詠ずるを愛す」詩に「辭章諷詠して千首を成し、心行歸依して一乘に向かう。坐して繩牀に倚り閑かに自から念う、前生は應に是れ一詩僧なるべしと」とある。「禪心月下」は禪月大師と稱された五代の著名な詩僧たる貫休を連想したか。

「巨卿」は後漢の范式。かれは友人の張元伯と二年後の再會を約束し、期日を違えなかった。ここは今關氏の龍氏にたいする友情が范式のごとく堅固なものかどうかを確認したのだろう。

第七・八句は、今關氏の自嘲。「錦囊」は、唐の詩人李賀がふだん小囊を背負い、驢馬に跨って出かけ、「佳句」ができると記して囊中に入れた故事を受ける。「匡山」は夏の避暑地として有名な江西の廬山。

龍氏はこの詩に次韻した「再び前韻を用いて天彭先生に答う」（『詩歌集』「忍寒廬吟稿」一九四二年）で、今關氏の人柄と詩風をうたいあげる。

飄然詩思出仙瀛　飄然たる詩思は仙瀛より出で
怪底難將一體名　怪しき底よ一體を將って名づくるに難し
遺世風標欽特立　世を遺る風標は特立せるを欽い
感時襟抱契平生　時に感ずる襟抱は平生に契る
心親每喜攀晁監　心は親しく毎に喜ぶ　晁監に攀ず

るを

游倦翻愁擬馬卿　游に倦み翻(かえ)って愁う　馬卿に擬せらるを

愧負山靈歸未得　愧ず　山靈に負(そむ)き　歸ること未だ得ざるを

蓮開火宅計誰成　蓮は火宅に開く　計は誰か成さん

「晁監」は唐の玄宗のもとで祕書監をつとめた晁衡、つまり日本から唐に渡った阿倍仲麻呂、ここは今關氏をたとえる。「馬卿」は、漢の代表的文人で字は長卿だった司馬相如、ここは龍氏自身をたとえる。

第七・八句は、龍氏の自嘲。「愧負山靈」は、南朝梁の孔稚珪の「北山移文」が鍾山の隱遁生活をやめて官職についた周顒を「山靈」をかりて風刺したのにもとづき、俗界を離れ山中に隱遁できぬおのれを恥じ、今關氏の末句に對應する。「蓮開火宅」は「維摩經」佛道品に「火中に蓮華を生ず、是れ希有と謂う可し。欲に在りて禪を行うも、希有は亦た是(か)くの如し」とあり、煩惱からの解脫をいう。龍氏の重視する文廷式の「水調歌頭・病中戲れに友人に答う」詞にも「倦まば卽ち肱を曲げて臥し、火宅は已に蓮を生ず」とある。その「計」は「誰」が「成」すか。おのれにはできない。

この詩を見た今關氏はそれに次韻した「再び楡生の韻に次し却寄す」（「天彭詩集」巻十）で、龍氏の現在の詞人としての情況をうたう。

渺茫胸宇納滄瀛　渺茫たる胸宇に滄瀛を納め

歌鳳非無狂客名　鳳を歌うは狂客の名無きに非ず

傳硯高情佳話遍　硯を傳う高情　佳話遍く

刻詞新册古香生　詞を刻せし新册　古香生ず

何慙奔走爲斯道　何んぞ慙ぢん　奔走し斯道を爲すを

儘用幽閑傲六卿　儘(ほし)いままに幽閑を用いて六卿のごとく傲れ

雲起軒頭雲復起　雲起軒頭に雲は復た起く

待君手葺數椽成　君が手ずから數椽を葺き成すを待

たん

「雲起軒頭」に今關氏は「君は文芸閣の同郷爲り」あなたは文廷式と同郷人だ、と注する。文廷式（一八五六－一九〇四）、字は道希、號は芸閣、純常子、龍氏と同じく江西省萍鄉の人。この翌年一九四三年、龍氏はかれの詞を校輯した「重校重評雲起軒詞」を同聲月刊社から出版し、「文芸閣先生詞話」をまとめて付錄した。

「歌鳳」は「論語」微子篇に「楚狂の接輿は歌いて孔子を過ぎて曰わく、鳳よ鳳よ、何ぞ德の衰えたる。往く者は諫む可からず、來たる者は猶お追う可し。已めよ已めよ、今の政に從う者は殆きかな、と。」とある。

「傳硯」は龍氏が後繼者として臨終の朱祖謀からふだん愛用の雙硯を授かり、そのさまを繪に畫かれた故事。「刻詞」は、朱氏の遺命をうけ、何ヶ月もかけて「彊村遺書」を校輯刊行したことをいうか。

「六卿」は「春秋左氏傳」昭公十六年に「君は幼弱、六卿は強くして奢傲なり。將に是れに因り以って習わんとす」とある。

末句は、陸游の閑居の「喜びを書す」詩に「鄰媼は已に諸子の養うに安んじ、園丁は初めて數椽を葺き成す」とある。ここは龍氏の新たな詞作をいおう。

さて、以上の兩氏の唱和は、この年の夏のことと思われるが、秋になると、今關氏は東京に歸ったらしく、龍氏の七絕「秋曉に今關天彭先生を懷う有り」（「歌詞集」「忍寒廬吟稿」一九四二年）にはいう、

一自歸帆向海東　一に歸帆の海東に向かいて自り
思君望斷早霞紅　君を思いて望斷し　早霞は紅いなり
楓林瑟瑟金風裏　楓林は瑟瑟たり　金風の裏
知得秋心幾處同　知り得たり　秋心は幾處か同じきを

そして、奇妙なことに、これだけの厚い友情で結ばれていたはずの今關氏にたいして、この後は一九五四年まで龍

氏は詩を作っていない。しかし、それには深刻な理由があったのである。

二

張暉氏の「龍榆生先生年譜」巻二、一九三一年（民國二十年辛未）、三十歳、にはいう、

十二月三十日（陰暦十一月二十二日）、朱祖謀は上海の寓廬に歿す、年七十五。卒前に遺稿と詞を校する朱墨の雙硯とを以って相い授け、幷びに夏敬觀に托し「上彊村の硯を授くる圖」（辛未十月繪がく）を畫かしめ、且つ親しく之を見るに及ぶ。此の事は先生に影響すること極めて大きく、也た先生をして終身彊村の詞學に服膺し、之を發揚光大せしむ。

龍氏はこの朱氏の身後の事を處理するなかで、朱氏の詞學での門人で、すぐれた詞人であり、「雙鑑樓詞」の詞集もある汪精衞と關係を深め、詩詞の唱和をするようになっていった。

それから九年後、「龍榆生先生年譜」巻三、一九四〇年、三十九歳、にはいう、

四月二日、先生は任命せられ（汪精衞の南京國民政府の）立法院立法委員と爲る。當時先生は仍お上海に在り、事先には未まだ任何なる消息も得ず、而るに報刊上は已に先生が立法委員に就任せるを登載し、立卽に友朋の非議を招來す。時に上海租界は各種の勢力が交叉し、環境は險惡にして、猶豫彷徨を經過し、滬（上海）に在る所有る教職を辭去し、一夜痛哭の後に在りて、滬を離れ寧（南京）に赴く。

また九月には、中央大學中國語文系教授兼主任となり、同時に汪精衞宅の家庭教師を擔任した。

しかし一九四五年八月の日本の敗戰によって龍氏の情況はすべて反轉し、一一月、國民黨教育部によって南京の老虎橋監獄に收監され、翌一九四六年三月、老虎橋監獄から

蘇州の獅子口監獄に移送された。そして、六月、蘇州市高等法院で裁判がおこなわれ、その判決文は、「龍沐勛は敵國に通謀し、本國に反抗するを圖謀す。有期徒刑十二年に處し、公權を十年褫奪し、全部の財產は家屬必需の生活費を酌留するを除く外は沒收す」というものだった。

その後、一九四八年二月、各方面からの保釋により出獄し、胃病の治療をうけることになった。

さらに大きい轉機になったのは一九四九年一一月の、共產黨幹部たる陳毅將軍の接見である。もともとこの年九月、第一屆全國政治協商會議の席上、中國農工民主黨代表の張雲川が陳氏に龍氏のことを話題としたところ、軍人にして「陳毅詩詞選集」が死後出版された詩人でもある陳氏は高い關心を示し、住所も記入し、一一月初め、上海市長として上海に赴任すると、さっそく龍氏を呼び出し、現狀・意向などを質問したわけである。その結果、一一月一六日、龍氏は上海市文物管理委員會編纂に就任できたのである。

さらに、一九五二年一〇月、上海博物館が開館すると、陳毅市長の手配により、その圖書資料室の主任となった。

そして、やはりこの圖書資料室の職にあった一九五四年の春、漢奸の汚名が影響して世間との交渉は疎遠になっていたものの、なんとか身邊が平穩をとりもどした龍氏は、はるか離れた東京にいる今關氏のことを思い出し、七絕二首を作って今關氏に送った。それを今關氏はおのれが主宰する漢詩雜誌「雅友」第一八號（昭和二九年八月）に揭載した。その詩「甲午仲春、懷いを天彭先生に東京に寄す」（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五四年では、「懷いを海東の故人今關天彭〔壽麿〕に寄す」となっている）をあげよう。

偶緣文字託知音　偶たま文字を知音に託せしに緣(よ)りて
只有相思與日深　只だ相思の日と與(とも)に深き有るのみ
禹域初開新境界　禹域は初めて開く　新たなる境界
爲君東望一沈吟　君が爲に東のかたを望み一たび沈吟す

「禹域」の句は、一九四九年、中國共產黨によって中華

人民共和國が成立したことをいう。

幸得開籠放白鷳　幸いにも籠を開き白鷳を放つを得
更從洲渚聽關關　更に洲渚従り關關たるを聽く
當時促膝論先覺　當時は膝を促りて先覺を論ず
此意悠悠豈等閑　此の意は悠悠たり　豈に等閑ならんや

第三句は、「雅友」では「内藤湖南博士の言を謂う也」と自注するが、「歌詞集」では「今關は金陵に客たりし時、常に予を訪ね筆談を作す。東方の局勢は必ず共產に歸すに論及するや、今關は内藤湖南博士は已に早く此れに見及せりと謂い云う」となっている。

「開籠放白鷳」は唐の宋之問の「白鷳を放つ篇」に「玉徽は匣に閉ざし留めて念と爲し、六翮　籠を開き爾じが飛ぶに任す」とある。「白鷳」はあるいは囚われの監獄から出て自由の身となった龍氏自身をいうか。

「洲渚」「關關」は「詩經」周南「關雎」に「關關たる雎鳩は、河の洲に在り。窈窕たる淑女は、君子の好逑」とあり、さらに「窈窕たる淑女は、寤寐に之を求む。求めて之を得ず、寤寐に思服す。悠なる哉悠なる哉、輾轉反側す」とあり、日本にいる今關氏を「淑女」のごとくひたすら思いやっていることをいおう。

「此の意は悠悠たり」は、宋の張炎の「八聲甘州・玉關に雪を踏み清遊を事とするを記す」に「枯林古道に傍い、長河に馬に飲ましめ、此の意は悠悠たり」とあるが、「悠悠」は上の「關雎」の「悠なる哉悠なる哉」をうける。

さて、この二首が「雅友」誌上に發表されるや、濃密な關心を示されたのは、意外にも當時京都大學文學部教授の任にあられた小川環樹先生だった。「雅友」第二一號（昭和二九年一二月）に掲載された先生の七絕「頃ごろ雅友誌上に於いて龍榆生君の詩を見るを獲て、頗る悵觸有り、一束を修せんと欲するも果たさず、因りて俚句を草し感を誌す」をあげよう。

曾從海外識君名　曾つて海外従り君の名を識り

偶見新詩無限情　偶たま新詩を見て無限の情あり
松柏經寒凋總後　松柏は寒さを經るも凋むは總べて後(おく)る
未知何日話平生　未まだ知らず　何れの日にか平生を話さん

第一句によれば、小川先生は「海外」日本で中國の龍氏の「名」名聲を「識」られたことがわかる。ここで注意すべきは、張暉氏の「年譜」巻三、一九四一年三月三日に「日本東北大學支那學研究室より函の「同聲月刊」社に寄せらる有り」として、手紙のはじめの「頃ろ貴刊第二號を贈らるを承け、展讀の下、軸軸たる金聲。大雅の廢せざるは、實に貴刊に賴る。欽(つつ)しみて高風を想い、景仰何にか似ん」を紹介する。この時、小川先生は東北帝國大學助教授の任にあり、「同聲月刊」を讀み、この手紙を書かれた可能性は高い。また、後述する龍氏の一九五九年の作「戊戌歲晏に小川環樹を東京に懷う有り」詩の自注に「小川は十六七年前に予が刊布する所の海日樓詩を閲見するを得、遂に心契に愜う」とあり、東北大學からの禮狀の時期とあう。また龍氏の著作にも目を通しておられた。「京都產業大學圖書館所藏小川環樹文庫漢籍目錄」（京都產業大學圖書館、平成一四年三月）の「集部　第五詞曲類　一詞集之屬」には龍氏の「東坡樂府箋三卷」（民國二十五年上海商務印書館排印本）、「二詞選之屬」には龍氏の「唐宋名家詞選不分卷」（民國二十三年上海開明書店排印本）が收められている。

この翌年一九五五年に今關氏から送られた「雅友」で小川先生の詩を見た龍氏は、さっそく返答の詩を作った。七絕「偶たま雅友詩刊に於いて小川環樹が懷わるの作を讀むを獲て、率として原韻に依り之に報ゆ」（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五五年）をあげよう。

早知爲累是浮名　早(つと)に知る　累を爲すは是れ浮名なるを
往事如煙一愴情　往事は煙の如く　一に情を愴(いた)ましむ
紅日乍昇吾忘老　紅日は乍ち昇りて吾れは老いを忘

る

待敦夙好看新生　夙好を敦うして新生を看るを待たん

第四句について、龍氏は「末句は、彼邦の人士が中國の新生力量を認識し、愼みて更に他人の惑わす所と爲り、再び同種相い殘うの禍いを演ずること勿きを盼う也」と自注する。それに應ずる第三句の「紅日」は、「新生力量」、つまり毛澤東を中心とする中國共產黨をいう。

この年、小川先生は今關氏から送られてきた龍氏のこの和詩を目にして、さらにそれに次韻された。「去歲に曾つて龍君楡生の絕句を讀み、率として一絕を賦し感を志す。頃ごろ天彭詞翁の接到せし來書に接し、竝びに和韻の作を贈られて、輒ち前韻に疊して酬と爲す」と題され、「雅友」第二五號（昭和三〇年一一月）に發表された。

奔走紅塵豈爲名　紅塵に奔走するは豈に名の爲ならんや

清詩遠韻慰吾情　清詩遠韻　吾が情を慰む

晨星三五送殘夜　晨星は三五　殘夜を送り

坐待山頭初日生　坐して山頭に初日の生ずるを待たん

小川先生の和詩を見た龍氏は、「浪淘沙・小川環樹君は兩たび枉げて佳章を寄せられ、漫りに小調を拈り之に報い、仍お敎和を希う」詞を作り、翌年一九五六年の「雅友」第三一號（昭和三一年一二月）に揭載された。なお、詞題は「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五五年では「浪淘沙・小川環樹敎授に日本京都に報ゆ」となっている。

唱罷望瀛洲　唱い罷んで瀛洲を望み

聲氣相求　聲氣　相い求む

狂濤幾度撼閒鷗　狂濤は幾度か閒鷗を撼がしめし

留得餘生看好景　餘生を留め得て好景を看ん

此意悠悠　此の意は悠悠たり

煙霧眼中收　　煙霧は眼中に收め
願共擡頭　　願わくは共に頭を擡げん
秋陽皎皎豁吟眸　　秋陽は皎皎として吟眸豁たり
佳客正思懸榻待　　佳客は正に榻を懸けて待たんと思う
何日來遊　　何れの日にか來遊せん

上関の「留得餘生看好景」には事實の裏づけがあるのかもしれない。一九五六年二月、龍氏は國務院副總理の任にあった陳毅の按配により、特別に北京での政協第二屆全國委員會第二次會議に列席し、夜の宴會では「席に入りし後、毛（澤東）主席と一席を同じゅうし、左第二位に居る。毛と對座するは周（恩來）總理爲り。三たび起ちて主席の爲に乾杯す。鮑魚を食せし時、主席は是れ秦始皇の鮑魚なるや否やと問い、對うるに此れは鰒魚なるを以ってす。主席は衆に對して我が學問は他に及ばずと稱す呢」と日記に記している。

これは「詞」なので、小川先生にとっては龍氏が希望するような「教和」が難しいスタイルだったのだが、そこで助け舟を出したのが、先生の京大文學部での同僚で、同じく「雅友」の投稿者だった吉川幸次郎先生である。吉川先生はご自身の文學部の卒業論文が「倚聲通論」、つまり「倚聲」詞について漢文で書かれた概論だったことでも明らかなごとく、「詞」の韻律についても習熟しておられ、次韻も十分こなされた。そこで吉川先生が小川先生にかわって作られたのが、「浪淘沙・龍楡生の小川士解に寄せし韻に次す」詞（「吉川幸次郎全集」第二十巻「知非集甲」昭和三十年乙未）で、龍氏と同じく「雅友」第三一號に掲載された。

江左舊汀洲　　江左の舊汀洲
夢寐何求　　夢寐に何んぞ求めん
飄遙天地一沙鷗　　飄遙たる天地の一沙鷗
杜陵詩句曾經諳　　杜陵の詩句を曾經て諳んず
身世誠悠　　身世　誠に悠たり

日日夕陽收　　日日　夕陽　收まる
楚尾吳頭　　楚尾吳頭
登山臨海枉凝眸　　山に登り海に臨み　枉げて眸を凝らす
不知中國詞何似　　知らず　中國の詞は何似(いか)ん
山谷少游　　山谷か少游か

「知非集甲」では、「何」が「難」、「遙」が「颺」、「誠」が「悠」、「枉」が「幾」、「詞何似」が「誰詞客」と改められている。

「飄遙天地一沙鷗」、つまり「杜陵詩句」は、杜甫の「旅夜懷いを書す」詩に「飄飄として何の似たる所ぞ、天地の一沙鷗」とある。

「山谷」は宋の詞人黄庭堅、「少游」も宋の詞人秦觀である。

さて、龍氏からの詞に「敎和」せよとの要求は吉川先生の助太刀によりなんとか乘り切ったものの、小川先生はどうも釋然とされなかったようで、翌年一九五七年、「榆生教授は、海上自り新詞を寄せ和するを徵(もと)められ、復た朱古微・陳散原二老の遺墨を以って示さる。環(わたし)は倚聲に於いて素より習う所に非ず、以って之に答うる無し。而るも盛意は却け難く、率として俚句を賦し、兼ねて春禧を頌すと云う」という長題を付した七絶を作られ、「雅友」第三二號（昭和三二年三月）に掲載された。

休道天涯若比鄰　　道(いう)を休めよ　天涯は比鄰の若しと
滄瀛間阻得情親　　滄瀛は情の親しきを得るを間阻す
朱陳遺墨眞瓌寶　　朱・陳の遺墨は眞に瓌寶
長跪擧巵遙頌春　　長く跪づき巵を擧げて遙かに春を頌す

第一句は唐の王勃の「杜少府が任に蜀州に之くを送る」詩に「海内に知己存し、天涯は比鄰の若し」とある。

この詩に唱和する龍氏の七絶「次韻して小川君が寄せられしの作に答え奉つる」も、同じく「雅友」第三二號に掲

載された。

海水黏天德有鄰　海水は天に黏くも德は鄰有り
雙魚聊爲寄心親　雙魚　聊か爲に心の親しきに寄す
高歌李杜文章在　高歌す　李杜の文章在るを
共放光芒賦感春　共に光芒を放ちて春に感ぜしを賦す

「德有鄰」は「論語」里仁篇に「子曰わく、德は孤ならず、必ず隣有り」とある。「雙魚」は手紙で、たとえば杜甫の「梓州の李使君が任に之くを送る」詩に「五馬は何れの時にか到る、雙魚は會らず早く傳わらん」とある。「高歌李杜」は唐の韓愈の「張籍を調ける」詩に「李杜　文章在り、光芒　萬丈長し」とある。

三

この一九五七年、龍氏は小川先生と唱和するとともに、じつは吉川先生とも唱和を開始し、しかもこれ以後、唱和の相手は主に詞にも詩にも精通する吉川先生となるのである。この年の初め、龍氏はさきの吉川先生の「浪淘沙」次韻詞に返答する「鷓鴣天・吉川善之教授は枉げて拙作の浪淘沙詞に和せられ、幷せて輯する所の中國文學報を以って寄せらる。此れに倚りて答謝し、兼ねて今關天彭老及び小川環樹先生に訊ね、卽ち教和を希う」詞（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五七年では「吉川善之教授に東京に報ゆ」となっている）を作り、「雅友」第三三號（昭和三二年七月）に掲載された。

繭愛同功緒漸抽　繭は功を同じゅうするを愛し　緒は漸く抽く
盈盈一水望瀛洲　盈盈たる一水　瀛洲を望む
今宵只許談風月　今宵は只だ風月を談るを許さるるのみ
昨夢虛勞認斗牛　昨夢は虛しく勞す　斗牛を認むるを

新味蔗　　新たに蔗を味わい
舊盟鷗　　舊くは鷗と盟し
老夫乘興欲東游　老夫は興に乘じて東游せんと欲す
秦黄事業吾滋媿　秦・黄の事業　吾れは媿じを滋す
別誇朱絃好唱酬　別に朱絃を誇り好ろしく唱酬せん

「歌詞集」では「愛」が「白」、「昨夢虚勞認斗牛」が「相處偏宜著釣舟」、「誇」が「倚」に改められている。

上闋の「繭愛同功」は、いわゆる「同功繭」で、二蠶以上がいっしょに織り上げた繭をいい、「爾雅翼」釋蟲一に「其の獨り繭を成す者は、之を獨繭と謂い、二自り以上は、之を同功繭と謂う」とある。「緒は漸く抽く」は、宋の李芸子の「木蘭花慢・秋意」詞に「嗟休、緒に觸れて繭絲は抽く、舊事を續くるは何にか由る」とある。

「談風月」は、政治と無關係の清談をいい、「梁書」徐勉傳に徐勉の言葉として、「今夕は止だ風月を談る可く、公事に及ぶは宜しからず」とある。

「認斗牛」は、宋の蘇軾の「前の赤壁賦」に「月は東山の上に出で、斗牛の間に徘徊す」とあるのがひびくか。

下闋の第一・二句は、いまは新政權で次第によい狀況を味わっているが、舊政權では隱遁する他なかった、という意味か。「晉書」顧愷之傳に「愷之は甘蔗を食らう毎に、恆に尾自り本に至る。人或いは之を怪しむ。云う、「漸やく佳境に入る」と」とある。

第三句には「杜句を借用す」と注する。たしかに杜甫の「悶を解く十二首」に「爲に淮南の米の貴賤を問い、老夫は興に乘じて東遊せんと欲す」とある。

末句の「朱絃」は、あるいは黄庭堅の「快閣に登る」詩に「朱弦は已に佳人の爲に絕ち、青眼は聊か美酒に因りて横たわる。萬里　歸船　長笛を弄し、此の心　吾れは白鷗と盟す」とあるのがひびくか。

そして吉川先生がこれに唱和された「鷓鴣天・龍榆生の韻に次す」詞（「知非集甲」昭和三十一年丙申）も、同じく「雅友」第三三號に掲載された。

花草陳編久懶抽　　花草の陳編　久しく抽むに懶し

忽聞漁笛起蘋洲　忽ち聞く　漁笛の蘋洲に起こるを
冷冷似訴心中事　冷冷として心中の事を訴うるに似たり
一葦誰云風馬牛　一葦を誰か風馬牛と云う

看無主　主無きを看ること
如從鷗　鷗に從うが如し
逍遙欲學佛圖游　逍遙は佛圖の游を學ばんと欲す
尋章摘句千秋業　章を尋ね句を摘むは千秋の業
志願平生這裏酬　志願　平生　這(こ)の裏(うち)に酬いん

「知非集甲」では、「冷冷似」、「冷泠如」、「無」が「世」、「如」が「若」、「欲」が「堪」と改められている。上関の「花草陳編」は、「花間集」などスタンダードな「詞」の各種選集をいおう。明の陳耀文には明代の詞を集大成した「花草粹編」十二巻がある。

第二句は、南宋の詞人周密の詞集「蘋洲漁笛譜」により、龍氏の答謝の詞がまるで周密の作のように聞こえるという。「一葦」は、「詩經」衞風「河廣」に「誰か河は廣しと謂う、一葦もて之を杭(わた)る」とあり、龍氏の「盈盈たり一水瀛洲を望む」にたいする應答だろう。

下関の「逍遙欲學佛圖游」は、「莊子」の「逍遙遊」と高僧の佛圖澄をあわせるか。

ところが、この翌年一九五八年五月、龍氏は中國全土に吹き荒れた反右派闘争の嵐の中で右派とされ、三級教授から五級教授に降格となり、もとの社會的地位を失うとともに、友人たちとの交流もまれになった。この失意の時期、京都から寄贈された「中國文學報」第九册（一九五八年十月刊）を受け取った龍氏は「采桑子・戊戌重陽の後十日、吉川教授の寄贈せられし中國文學報第九册を得、此れを賦し報謝し、兼ねて小川環樹先生を懐う」詞（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五八年）を作った。

經年未得東來信　年を經るも未まだ東來の信を得ず
誰辯絃聲　誰か絃聲を辯ぜん
霧阻蓬瀛　霧は蓬瀛を阻むも

看取秋陽作意明　看取す　秋陽は意を作すこと明らかなるを

大同本是吾儒事　大同は本是れ吾が儒の事

凝想澄平　想いを澄平に凝らす

蕩盡羶腥　羶腥を蕩盡し

彈壓西風好共鳴　西風を彈壓して好ろしく共鳴せん

「西風」は歐米から押し寄せる西洋の思想・文化だろう。それを中國・日本が「共鳴」一體となって「彈壓」押し止めようというのである。なお、この第九册には、小川先生の王力「漢語詩律學」に對する書評も載っている。

これに唱和された吉川先生の「采桑子・次韻して龍榆生に答う」詞（「知非集甲」昭和三十三年戊戌）は「雅友」第四一號（昭和三四年五月）に、龍氏の原作とともに掲載された。

幸同文字過千祀　幸いに文字を同じくして千祀を過ぐ

玉振金聲　玉振金聲

詩選東瀛　詩選東瀛

當日兪樓偏眼明　當日の兪樓は偏えに眼の明らかなり

高賢蓮社頻揮麈　高賢は蓮社に頻りに麈（しゅ）を揮う

誰可持平　誰か平を持す可き

天地猶腥　天地は猶お腥し

聊愛吾廬衆鳥鳴　聊か愛す　吾が廬に衆鳥の鳴くを

「詩選」「當日」の二句は、清末の學者・文人たる「兪樓」兪樾が日本歷代の漢詩人の名作を選んでアンソロジー「東瀛詩選」を著わしたことをいう。

「高賢蓮社」は、南朝の高僧慧遠が江西の廬山で蓮社を主宰し、陶淵明らの高賢が集ったことをいう。「聊愛吾廬衆鳥鳴」は陶淵明の「山海經を讀む」詩に「群鳥は托する有るを欣び、吾れも亦た吾が廬を愛す」とある。

さらに舊曆では年末、新曆では翌一九五九年の初め、龍

氏は「戊戌歳晏に小川環樹を東京に懐う有り、兼ねて吉川善之教授・今關天彭詩老を訊ぬ」七絶三首（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五九年）を作った。それをあげよう。

往來頗喜談風月　往來　頗る風月を談るを喜び
酬唱聊堪紀雪泥　酬唱　聊か雪泥を紀すに堪えたり
草草杯盤人散後　草草たる杯盤　人散りし後
更無清夢到橋西　更に清夢の橋西に到る無し

「雪泥」は、雪どけの泥に鴻雁が殘した爪痕で、往事のささやかな痕跡をいい、蘇軾の「子由の澠池懐舊に和す」詩に「人生の到る處　知んぬ何にか似たる、應に飛鴻の雪泥を踏むに似るべし」とある。

「橋西」は、龍氏がかつて今關氏とともに詩會に參加した南京の「橋西草堂」。この一首は今關氏に贈る。

海日門庭許共窺　海日の門庭は共に窺うを許し
曾於斷簡愜心期　曾つて斷簡に於いて心期に愜う

不知詩思添多少　知らず　詩思は多少を添えたる
表斷三唐得巧師　三唐を表斷するに巧師を得たり

「小川は十六七年前に予が刊布する所の海日樓詩を閲見するを得、遂に心契に愜う。近ごろ唐詩概説を著わすも、一讀するを獲ざるを憾みと爲す」との自注あり。

「海日」は、「海日樓」という藏書樓を設けた、浙江嘉興の人で「中國大儒」の沈曾植（一八五〇－一九二二）。自注の「海日樓詩」、つまり「斷簡」は、龍氏が「同聲月刊」創刊號（一九四〇年一二月二〇日）から第一卷一二期（一九四一年一一月二〇日）にかけて「刊布」連載した、陳三立校勘の四卷本「海日樓詩」をいうだろう。「唐詩概説」は小川先生著になる岩波書店の中國詩人選集の一冊で、昭和三三年九月刊。この一首は小川先生に贈る。

久喜唐風盛海東　久しく喜ぶ　唐風の海東に盛んなるを
鮮鮮舊曲轉曈曨　鮮鮮たる舊曲は轉た曈曨たり

頗傳紙貴低徊甚　　頗る紙の貴きを傳えて低徊すること甚はだし
大雅知應致大同　　大雅は應に大同を致すべきを知る

第一句は、吉川先生の岩波新書「新唐詩選」（正編は昭和二七年八月、續編は昭和二九年五月刊）の日本での好調な賣れ行きをいおう。第三句の「紙貴」も同樣。「鮮鮮」は鮮麗な。唐の韓愈の「秋懷詩」に「鮮鮮たり露中の菊、既に晩ければ何ぞ好きを用いん」とある。「舊曲」は唐詩で、「瞳曨」は初日のごとく輝きを放つ意。「低徊」は、往事に思いをめぐらす。この一首は吉川先生に贈る。

この三首に小川先生が唱和されたかどうかはわからないが、吉川先生は小川先生にかわって唱和された。「龍榆生の小川士解に寄せし詩に和す、三首」（「知非集甲」昭和三十三年戊戌）がそれである。

海上築樓園未窺　　海上に樓を築きて園を未まだ窺（うかが）わず
當年宗伯孰鍾期　　當年の宗伯　孰（いず）れか鍾期なる
白頭弟子編遺集　　白頭の弟子　遺集を編し
淚灑前朝哀父師　　淚は前朝に灑ぎて父師を哀しむ

「榆生は方に沈氏曾植の海日樓詩を校刊す」との自注あり。

「海上」上海に樓を築いた「當年宗伯」は沈曾植。「園未窺」は、漢の大學者董仲舒の故事。「漢書」董仲舒傳には「帷を下して講誦し、弟子は傳うるに久次を以って相い授業し、或いは其の面を見る莫し。蓋し三年園を窺わず、其の精なる此くの如し」とある。「鍾期」は鍾子期で、「列子」湯問篇によれば、琴の名手兪伯牙が演奏すると、鑑賞の名手子期はそこに含まれる意味を誤り無く理解した。子期が死ぬや、伯牙は琴をつぶし絃を斷ち切ったという。ここは龍氏をたとえる。「遺集」海日樓詩を編修した「白頭弟子」も、自注のごとく龍氏をいうか。

心愛唐賢道久東　　心に愛す　唐賢の道　久しく東す

るを

務於情語析瞳曨　務めて情語に於いて瞳曨を析(わか)つ
別裁僞體吾何敢　僞體を別裁するは吾れ何んぞ敢えてせん

祖述唯如鄭小同　祖述すること唯だ鄭小同の如し

「楡生は謬(あやま)って拙著新唐詩選を賞す」との自注あり。

第二句は、陸機「文賦」に「其の致る也、情は曈曨として彌いよ鮮やかに、物は照晰として互いに進む」とある。この「曈曨」は、不明の意。

「別裁僞體」は、正統からはずれる詩を區別淘汰することで、杜甫の「戯れに六絶句を爲す」の第六首に「僞體を別裁し風雅に親しみ、轉た益ます多師是れ汝が師」とある。

「鄭小同」は後漢の大學者鄭玄の孫で、祖父を「祖述」し、六經に通じ、曹髦に「尚書」を授けたりしたが、司馬昭に毒殺された。ただ太尉の華歆の「表」には小同について、「質直にして渝(かわ)らざるの性有り」という。

詩筒來往紛如雨　詩筒の來往は紛として雨の如し
杯酒縱橫醉似泥　杯酒は縱橫として醉うて泥に似たり

一點靈犀尚通否　一點の靈犀　尚お通ずるや否や
桂堂東畔畫樓西　桂堂の東畔　畫樓の西

「今關天彭丈、昔南京に在るや、楡生と過從すること尤も密なり」との自注あり。

「一點靈犀」「桂堂東畔」は唐の李商隱の「無題」詩に「昨夜の星辰　昨夜の風、畫樓の西畔　桂堂の東。身には彩鳳雙飛の翼無く、心には靈犀一點の通有り」とある。

この先生の三首を受けて、龍氏はさらに「吉川善之教授は辱けなくも拙詞に和され、復た懷い奉つる三絶句の原韻を用いて寄せらる。感は予の心に於いて絶えず、再び疊じて報い奉つる」七絶三首（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五九年）を作り、唱和した。

寂叟三關未易窺　寂叟の三關は未まだ窺い易からず

聊從海外覓牙期　聊か海外従り牙期を覓めん
何心更話前朝事　何の心ぞ　更に前朝の事を話さんとは
造化悠悠宜所師　造化は悠悠　宜しく師とすべき所なり

「寐叟三關」は、「寐叟」沈曾植が「金蓉鏡太守と與に詩を論ずる書」で述べた三關説で、詩には元祐・元和・元嘉の三關があり、詩玄結合、つまり經學・玄學・理學・佛學の精華を詩に取り入れる、因詩見道、つまり儒家の人文精神にもとづき、深沈博大な傳統文化の生命觀を表すという内容。

「牙期」はさきの兪伯牙と鍾子期。

麗藻鮮鮮出海東　麗藻は鮮鮮として海東より出で
紫霞深處見曈曨　紫霞の深き處に曈曨たるを見る
各應留得童心在　各おの應に童心を留め得て在るべし

看到車書竟混同　車書の竟に混同するを看到らん

「車書」云云は「禮記」中庸篇の「今天下は車は軌を同じゅうし、書は文を同じゅうす」にもとづき、日本と中國との一體化をいおう。唐の郭子儀の「享太廟樂章」に「河海は靜謐、車書は混同」とある。

一點通犀自駭雞　一點の通犀は自のずと雞を駭かし
雙飛紫燕會銜泥　雙飛せる紫燕は會らず泥を銜む
殷勤好共騷人語　殷勤として好し騷人の語を共にせん
遠夢何勞向海西　遠夢　何んぞ海西に向かうを勞せん

第一句は、「楚辭」九嘆「怨思」、つまり「騷人の語」に「芳芷を腐井に淹れ、鷄駭を筐篚に棄つ」とある珍獸「駭鷄犀」の故事。「抱朴子」登涉篇には「通天犀の角は、一

赤理の綅の如き有り、本自り末に徹する有り。角を以って米を盛り、鷄群の中に置けば、鷄は之を啄(つい)ばまんと欲するも、未まだ至らざること數寸にして、卽ち驚き却退す。故に南人は或いは通天犀を名づけて駭鷄犀と爲す」とある。

第二句は、唐末の牛嶠の「憶江南・泥を銜む燕」詞に「憶う泥燕の、飛びて畫堂の前に到るを」とあり、清の車萬育の「聲律啓蒙」に「泥を銜む雙紫燕、蜜を課す幾黄蜂」の對がある。

「海西」は、海東の日本にたいしてこちら中國本土をいうか。

この三首を受けて、吉川先生は「雅友」第四一號（昭和三四年五月）に「己亥二月九日、東海道線の車中」（「雅友」第四四號昭和三四年一一月、「知非集甲」昭和三十四年己亥では「晉京の車中又た楡生に疊和す、三首」となっている）を掲載し、唱和された。

乾嘉樸學略曾窺　乾嘉の樸學　略ぼ曾つて窺(うかが)う
尤覺段錢心所期　尤も覺ゆ　段錢は心に期する所な
　るを
半百年過猶碌碌　半百を年は過ぎて猶お碌碌
成均顏厚曰人師　成均に顏厚くして人の師と曰う

「乾嘉樸學」は乾隆・嘉慶時代の考證を主とする漢學で、「段錢」段玉裁・錢大昕はその中心人物。「成均」は「周禮」大司樂に出る太古の學校。ここは「半百」五十歲あまりの吉川先生が勤務される京都大學。

舊夢依然震澤東　舊夢は依然たり　震澤の東
吳頭楚尾思曚曨　吳頭楚尾　思い曚曨
懷人詩就歎難寄　人を懷う詩就(な)りて寄せ難きを歎ず
名籍如今頗異同　名籍は如今　頗る異同

「震澤」は太湖の別名、その「東」は蘇州あたりか。

曙色葱葱隨曉雞　曙色は葱葱として曉雞に隨い
劫餘三島絕拘泥　劫餘の三島は拘泥を絕つ

送行聊問乘槎客　　行を送るに聊か乘槎の客に問う
樂國豈唯銀漢西　　樂國は豈に唯だ銀漢の西のみならんや

第一句は、復興のはじまった日本をたとえるか。「劫餘」戰災を經過した「三島」は日本。「乘槎客」は、晉の張華の「博物志」巻十に、海渚に住む者が、八月になるとやってくる槎をみて、その上に飛閣を立て、槎に乘って海に浮かび、天の川に至り、織女・牽牛と遇った話をのせる。「樂國」は樂土で、「詩經」魏風「碩鼠」に「逝くゆく將に汝を去り、彼の樂國に適かんとす。樂國樂國、爰に我が直を得ん」とあり、日本も含まれよう。「銀漢」は天の川。

この後、吉川・小川兩先生が主編された「中國詩人選集」（岩波書店）の三種「詩經國風」（上は昭和三三年三月、下は同年一二月刊）「唐詩概說」「李煜」を送られて、龍氏は「吉川善之・小川士解兩教授は中國詩人選集を主編され、三種を以って寄せらるるを承け、各おの一絕を賦して謝を致す」七絕三首（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五九年）を作った。そのうちの二首をあげよう。まず「吉川教授は詩經國風を註す」と注する第一首。

盈耳洋洋樂未央　　耳に盈ち洋洋たり　樂は未まだ央きず
微言相感意難忘　　微言　相い感じ　意は忘れ難し
折衷漢宋成新解　　漢・宋を折衷して新解を成し
扇得芳風萬里長　　芳風を扇ぎ得て萬里長し

「盈耳洋洋」は、詩經の歌の開放された優美な響きは耳に滿ち溢れるということで、「論語」泰伯篇に「師摯の始め、關雎の亂は、洋洋乎として耳に盈つる哉」とある。「漢宋」は、漢の鄭玄の「毛詩鄭箋」と宋の朱熹の「詩集傳」の詩經解釋。「芳風」は「國風」を意識するか。

つぎは「小川教授の唐詩概說」と注する第二首。

四唐遺韻費鑽研　　四唐の遺韻　鑽研を費し
逆志應須讓後賢　　志を逆うは應に須べからく後賢に

讓るべし

幾輩詞源疏鑿手　幾輩か詞源疏鑿の手なる
知他愛好是天然　知んぬ　他(か)の愛好は是れ天然なるを

「四唐」は初・盛・中・晩の唐。「詞源疏鑿手」は、朱祖謀が張惠言の詞集「茗柯詞」に題して「瀾を回す力もて、選家の能を標擧す。自のずと是れ詞源疏鑿の手、横流一別淄澠を見(あらわ)す。四農生に異議す」と張を評價する。（「彊村語業」巻三）「四農生」は詞の評論家周濟。

「逆志」は、ここでは唐詩の解釋をいい、「孟子」萬章篇上に「故に詩を說く者は、文を以って辭を害さず、辭を以って志を害さず、意を以って志を逆う、是れ之を得と爲す」とある。

さらにこの夏、龍氏は吉川先生が東海道線車中で唱和された三絕句に答禮する「生查子・吉川善之敎授が東京の火車中に和されし三絕句を展誦し、更に小詞を寄せ、竝びに舊藏の海日樓遺詩を檢して贈と爲す」詞（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五九年）を作った。

奇峰幻夏雲　奇峰は夏雲の幻(まぼろし)たり
紈扇消煩暑　紈扇は煩暑を消す
搖兀警敲眠　搖兀として敲眠を警め
拾取驚人句　人を驚かす句を拾取す

天風喜暫來　天風　暫(しばら)く來たるを喜び
海日明初吐　海日　初めて吐くに明らかなり
何用發幽情　何んぞ幽情を發するを用いん
零落蘭成賦　零落す　蘭成の賦

「奇峰」云云は、晉の顧愷之の「神情詩」に「春水は四澤に滿ち、夏雲は奇峰多し」とある。「敲眠」は宋の王安石の「漁家傲」詞に「午枕　覺め來たりて語鳥を聞き、敲眠　朝鷄の早きを聽くに似たり」とある。

「零落蘭成賦」は北周の「蘭成」庾信の「哀江南賦」に「況んや復た零落して將に盡きんとし、靈光は巋然たり」

とある。

さらにこの秋、龍氏は「天彭詩老を懷い、兼ねて吉川善之・小川士解の兩教授に寄す」七絕三首（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五九年）を作り、三氏を詠じた。まずは今關氏。

銑心掐胃孰爲儔　心を銑し胃を掐るは孰れか儔と爲す
詩老揮毫老更適　詩老　毫を揮うは老いて更に適なり
今日桃源隨處有　今日　桃源は隨處に有り
唐風大扇望瀛洲　唐風は大いに扇ぎて瀛洲を望む

「銑心掐胃」は、韓愈が詩友の孟郊のために書いた「貞曜先生墓誌銘」で孟郊の詩作を描寫して、「目を劇り心を銑し、刃迎え縷解く。章を鉤げ句を棘て、胃腎を掐擢す」とある。ここは今關氏の詩作をたとえる。

つぎは吉川教授。

眞成樸學繼乾嘉　眞成の樸學は乾嘉を繼ぎ
數到葩經願轉奢　葩經に數え到りて願いは轉た奢れり
曲盡世情元雜劇　世情を曲盡す　元の雜劇
多君一例咀英華　君が一例に英華を咀みわくるを多とす

「葩經」は「詩經」で、韓愈の「進學解」に「詩は正にして葩なり」とあるのにもとづく。ここは吉川先生が「詩經國風」を刊行されたことをいう。「元雜劇」云々は先生の「元曲選釋」「元雜劇研究」などをいう。

つぎは小川教授。

寫艷長驚吳彩鸞　艷を寫き長に驚く　吳彩鸞
漢音演變亦多端　漢音の演變も亦た多端
同聲相應情何似　同聲の相應ずる　情は何似ん
且向遺編試探看　且つは遺編に向かいて試みに探り看よ

「吳彩鸞」は唐の大和年間に活躍した女性で、家が貧しかったので、書物の抄寫を生業とし、「切韻」「唐韻」「玉篇」など中國音韻學の重要典籍の抄本が傳わる。その小楷の書體は「艷」圓潤だった。ここは小川先生の「唐詩概說」に唐詩の押韻を解說されていることを反映するか。

「同聲相應」は、「易經」乾卦に「同聲は相い應じ、同氣は相い求め、水は濕に流れ、火は燥に就き、雲は龍に從い、風は虎に從う」とある。

この三首にまず唱和したのは、今關氏である。「雅友」第四四號（昭和三四年一一月）に掲載の「忍寒居士は遙かに寄詩有り、次韻し以って答う」三首をあげよう。

金陵山下舊仙儔　金陵山下　舊き仙儔
想見青雲逸思遒　想見す　青雲　逸思遒なるを
休笑老來無氣力　笑うを休めよ　老來　氣力無きを
海懷時復結滄洲　海懷は時に復た滄洲に結ぶ

末句に「君は海客を以って予を目す」との自注あり。末句は、李白の「秋夕懷いを書す」詩に「海懷は滄洲に結び、霞想は赤城に遊ぶ」とある。

落帽高風老孟嘉　帽を高風に落とすは老いし孟嘉
追懷淸事願寧奢　淸事を追懷す　願いは寧んぞ奢なる
重陽時節白門路　重陽の時節　白門の路
連酌紹興簪菊華　紹興を連酌し菊華を簪す

「落帽高風」は、「孟嘉別傳」によれば、「九月九日、（桓）溫は龍山に遊び、僚寮は畢く集う。時に佐史は幷びに戎服を著す。風は嘉の帽を吹き墮落せしむ。溫は左右に言う勿れと戒め、以って其の擧止を觀る。嘉は初めより覺らず、良や久しくして厠に如く。命じ取り之を還さしめ、孫盛をして文を作り之を嘲らしむ。成るや、嘉の坐に箸せしむ。嘉は還るや卽答し、四坐は嗟嘆す」とある。「白門」は南京をいう。

羽扇綸巾跨碧鸞　羽扇綸巾　碧鸞に跨がり
江南風月在毫端　江南の風月は毫端に在り
艸堂知得猶依舊　艸堂は猶お舊に依るを知り得たり
幾度雲牋帶淚看　幾度か雲牋は淚を帶びて看き

「艸堂」には「橋西艸堂」との注あり。

「羽扇綸巾」は、蘇軾の「念奴嬌・赤壁懷古」詞に「羽扇綸巾、談笑の間、檣櫓は灰飛煙滅す」とあり、音樂に精通した吳の周瑜をうたう。ここは龍氏をたとえるだろう。

ついでこの三首に唱和されたのは、吉川先生である。「龍榆生詩の韻に次して却寄す、三首」（「知非集甲」昭和三十四年己亥）を「雅友」第四五號（昭和三五年二月）に掲載された。

險韻詩來不易儔　險韻の詩の來たれば儔するに易からず
知君海上曲聲適　知んぬ　君が海上に曲聲の適なるを
翰林蹤跡文徵仲　翰林の蹤跡は文徵仲
課讀楞嚴趙大洲　課して楞嚴を讀ましむるは趙大洲

「文徵仲」は明の詩書畫すべてに優れた文人文徵明で、かれは翰林待詔の官についた。「趙大洲」は明の居士で、直講兼翰林學士の官にあり、庶吉士を教習するときに、楞嚴經を讀むことを課し、「諸君は齒いも亦た長ぜり。此の時を以って此の經を讀まずんば、更に何をか待たん耶」と述べた。いずれも龍氏をたとえる。

拾遺六代託王嘉　遺を六代に拾うは王嘉に託さん
太史微言悲伍奢　太史の微言は伍奢を悲しむ
何限人間前後浪　何限の人間の前後浪
劇中關某語高華　劇中の關某の語は高華
「關漢卿の關大王獨赴單刀會に云う、長江よ、今は幾たびの戰場をか經たる、恰かも便ち似たり後の浪の前の浪を催すに」との自注あり。

第一句は東晉の王嘉が「拾遺記」を著わして「六代」夏・殷・周・秦・漢・魏の故事傳說を記錄したことによる。第二句は漢の「太史」公司馬遷が「史記」伍子胥傳で、楚の平王の太子建の太傅だった伍奢が讒言により殺されることを述べるが、最後に「太史公曰わく」として「向に伍子胥をして奢に從い俱に死せしむれば、何んぞ螻蟻に異ならん。小義を棄て、大恥を雪ぎ、名は後世に垂る。悲しい夫」とコメントする。

自笑吾詩鏡裏鸞　自ずから笑う　吾が詩は鏡裏の鸞
徘徊己影興無端　己が影に徘徊して　興　無端
歩先生韻尤堪快　先生の韻に歩するは尤も快とするに堪えたり
留與來今倘可看　來今に留與して倘しくは看る可けん

第一・二句は、南朝宋の范泰の「鸞鳥詩序」に「昔罽賓王は置を峻祁の山に結び、一鸞鳥を獲たり。王は甚はだ之を愛し、其の鳴くを欲するも致す能わざる也。乃ち飾るに金樊を以ってし、饗するに珍羞を以ってするも、之に對して愈いよ戚い、三年鳴かず。其の夫人曰わく、「嘗つて鳥は其の類を見て後に鳴くと聞く。何ぞ鏡を懸け以って之を映さざる」と。王は其の言に從う。鸞は影を睹て契を感じ、慨然として悲鳴し、中霄に哀響し、一奮して絕ゆ」とある。

さらにこの年の末、龍氏は一年前の「戊戌歲晏」の七絕三首に次韻する「己亥歲晏、吉川善之教授を日本京都に懷う有り、再び前韻を用い、兼ねて天彭詩老・士解教授に簡す」七絕三首（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九五九年）を作った。

每愛銀盤上海東　每に愛す　銀盤の海東に上るを
尤欣曉日見曈曨　尤も欣ぶ　曉日の曈曨たるを見わすを
當年喜聽荒雞語　當年は荒雞の語を聽くを喜び
海宇澄平願定同　海宇澄平　願いは定めて同じからん

「荒雞」は「晉書」祖逖傳に祖逖が「司空の劉琨と倶に司州主簿爲り、情好は綢繆、被を共にし同じく寢ぬ。中夜に荒雞の鳴くを聞き、琨を蹴り覺して曰わく、此れは惡聲に非ざる也、と。因りて起きて舞う」とある。

辛黄門戶舊曾窺　辛・黄の門戶は舊に曾つて窺う
村結朱陳愜素期　村は朱・陳に結びて素期に愜う
文采風流長在眼　文采風流は長に眼に在り
經師可竝作人師　經師は竝びに人師と作る可し

「朱」には「彊村」、「陳」には「散原」の自注あり。

「辛黄」は辛棄疾、黄庭堅、いずれも宋の詞人。「朱陳」は自注のごとく、朱祖謀、陳三立。

當年頗喜聽荒雞　當年は頗る喜ぶ　荒雞を聽くを
嬾問禪心絮墮泥　問うに嬾し　禪心は絮の泥に墮つるかと
自幸老來居樂國　自から幸いとす　老來　樂國に居るを
懷人月在小樓西　人を懷いて月は小樓の西に在り

「禪心絮墮泥」は宋の惠洪の「冷齋夜話」巻六「東坡は道潛（詩僧參寥の號）の詩を稱す」に「坡が東徐に移守するに及びて、潛は往き之を訪い、逍遙堂に館す。士大夫は爭いて面を識らんと欲す。東坡は客を饌し罷り、與に倶に來たり、而して紅妝が擁して之に隨う。東坡は一妓を遣て前みて詩を乞わしむ。潛は筆を援りて成る、曰わく、「語を寄す巫山の窈窕娘、好く魂夢を將って襄王を惱ます。禪心は已に泥に沾おう絮と作り、春風を逐いて上下に狂わず」と。一座は大いに驚き、是れ自り名は海內に聞こゆ」とあり、明の王次回の「車中再び贈る二首」にも「愁顏幾日　花は雨に吹かれ、歡緒　今從り絮は泥に墮つ」とある。第三句は、龍氏の本心なのか、どうなのか。

四

さて、大躍進失敗により空前の食料不足にあえいでいた

大陸で、依然として右派と目され不遇をかこっていた一九六〇年の秋、甲状腺癌を割除するため徐家滙の上海第一醫學院附屬第一醫院に入院中の龍氏は「庚子の秋、病いに上海に臥し、士解教授を京都に懐う有り、兼ねて天彭詩老・善之教授に呈す」七絶四首を作り、「雅友」第五〇號（昭和三五年一二月）に掲載された。

相應同聲識面遲　同聲に相い應ずるも　面を識ること遅し
樓開海日耐沈思　樓は海日を開き　沈思に耐う
生花筆映知非集　花を生ずる筆は知非集に映じ
想見晴窓染翰時　想見す　晴窓に翰を染むる時を

「生花筆」は、詩人李白の故事。五代の王仁裕の「開元天寶遺事」に「李太白は少時、用いる所の筆の頭上に花を生ずるを夢む。後に天才贍逸、名は天下に聞こゆ」とある。「知非集」は吉川先生の漢詩文集で、中央公論社、昭和三五年八月刊。「知非」は、「淮南子」原道訓に「凡そ人の中壽は七十歳、然れども趨舍指湊、日に月を以って悔ゆる也、以って死に至る、故に蘧伯玉は年五十にして四十九年の非有り」とある。

この詩は吉川先生を詠ずる。

誰家池館劇玲瓏　誰が家の池館ぞ　劇めて玲瓏
中有太湖石數峰　中には太湖石數峰有り
傍晩波間來照影　晩に傍いて波間に照影來たり
拒霜開向臉邊紅　拒霜は開き臉邊に向いて紅いなり

「醫院の後園には、亭臺竹石の勝有り、是れ誰家の別業なるかを知らざる也」との自注あり。

「拒霜」は、木芙蓉で、七月から十月にかけて桃色や白い花をつけるが、ここは紅色。

壯歳曾窺片假名　壯歳　曾つて片假名を窺きしに
老來善忘愴勞生　老來　善く忘れ　生を勞するを愴む

何當更與從頭學　何當か更に與に頭從り學び
皎皎秋陽照眼明　皎皎たる秋陽の眼を照らして明らかならん

天彭詩格益堅蒼　天彭の詩格は益ます堅蒼
更口知非引興長　更に口（？）非を知り興を引くこと長し
窮瞎太疎仍寄語　窮瞎せる太疎は仍お語を寄せ
橋西舊夢總荒唐　橋西の舊夢は總べて荒唐

「橋西主人（李宣倜）は、頃ごろ忽ち雙目失明す。晤いし時、苦はだ天彭詩老を以って念と爲す」との自注あり。

この四首に唱和した今關氏の「懷いを忍寒居士に寄せ、其の寄せられし詩の韻に次す」が一年後の「雅友」第五五號（昭和三六年一二月）に掲載された。

老病交侵回國遲　老と病と交ごも侵し國に回ること遲し
千人甚事枉尋思　千人　甚事ぞ　枉げて尋思するは
斷虹飛雨宛猶見　斷虹飛雨は宛がら猶お見るがごとし
浦口口頭分手時　浦口の口頭に分手せし時

「千人」は、才幹のある人で、「抱朴子」行品篇に「凝結に臨みて能く斷ち、繩墨を操りて私無き者は、千人也」とある。ここは龍氏をいう。「浦口」は、南京の西北部、長江の北岸に位置する波止場。

空靈一悟一玲瓏　空靈を一たび悟り　一たび玲瓏
海上遙望天際峰　海上　遙かに望む　天際の峰
雲起後身漚尹適　雲起の後身　漚尹の適
肯教沈病褪春紅　病いに沈みて春紅を褪せしむを肯んぜんや

「雲起」は「文芸閣」文廷式、「漚尹」は「朱古微」朱祖謀との自注あり。

「空靈」は、靈活で清新なさま。

海外曾傳文武名　海外　曾つて傳う　文武の名
夢遺雙筆是平生　夢に雙筆を遺らるは是れ平生
六朝金粉依然麗　六朝の金粉は依然として麗わし
一失休傷左氏明　一失　傷むを休めよ　左氏の明を
「太疎を懷う」との自注あり。

「夢遺雙筆」は、唐の詩人李嶠の故事。「舊唐書」李嶠傳によれば、「兒童爲りし時、夢に神人の之に雙筆を遺る有り。是れ自り漸く學業有り」とある。

「六朝金粉」は、白粉で艶やかに化粧した女性たちで華やいだ、六朝を通して首都だった建康、つまり南京の繁華なさまをいい、それは民國時代もそうだったし、人民共和國でもかわるまい。

末句は、「春秋」の注釋「左氏傳」を著すも雙目失明した魯國の史官左丘明に「太疎」李宣倜氏をなぞらえる。

日尋老木倚空蒼　日に老木を尋ね空蒼に倚り
顧影低徊歎息長　影を顧りみ低徊し歎息すること長し
身在危機一髮裏　身は危機一髪の裏に在り
太平寧忍付荒唐　太平　寧んぞ忍びんや　荒唐に付すに
「獨語」己れの獨り言との自注あり。

この詩と前後する一九六一年九月、龍氏は右派のレッテルをはずされ、名譽回復した。この頃に作った「蝶戀花・夏夜に江南の田野の間を行き、吉川善之〔幸次郎〕小川士解〔環樹〕兩教授を日本京都に懷う有り」詞（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九六一年）にはいう、

野曠風多宜歇夏　野曠く風多く　宜しく夏を歇むべし
雨過江南　雨は江南を過ぎ
景物眞瀟灑　景物は眞に瀟灑

燈火樓臺身入畫　燈火　樓臺　身は畫に入り
畫中誰是悠悠者　畫中　誰か是れ悠悠たる者ぞ

曳杖鏗然占靜夜　杖を曳き鏗然として靜夜を占め
雲幻奇峰　雲は奇峰の幻(まぼろし)となり
似接蓬山也　蓬山に接するに似たる也
欲把丹靑描變化　丹靑を把(と)り變化を描かんと欲するも
雲山莫辯眞和假　雲山は眞と假とを辯(わか)つ莫し

この詞に唱和されたのは、吉川先生で、「蝶戀花・次韻して忍寒詞人の夏夜江南田野の間を行き、欣然として得る有るに答う」詞（「吉川幸次郎全集」第二十巻「知非續集」昭和三十五年庚子）をあげよう。

金奏洋洋歌肆夏　金奏洋洋として肆夏を歌う
國脈中興　國脈中興し
懷抱宜揮灑　懷抱　宜しく揮灑すべし

諸將雲臺功屢畫　諸將は雲臺に功屢(しば)しば畫(え)がかる
悠然知子猶儒者　悠然として知んぬ　子は猶お儒者なるを

東去大江淘晝夜　東去の大江は晝夜に淘(あら)う
月在薜蘿　月は薜蘿に在り
清操如回也　清操　回也の如し
兩部蛙吹觀物化　兩部の蛙吹　物化を觀る
窩中安樂誰云假　窩中の安樂　誰れか假と云う

「金奏」云々は、「禮記」玉藻篇に「趨くに采齊を以ってし、行くに肆夏を以ってす」、「周禮」春官宗伯「鎛師」に「鎛師は金奏の鼓を掌どり、凡そ祭祀は、其の金奏の樂を鼓す」とあり、隋の虞世南の「獻歲に宮臣を宴するに和し奉つる」詩に「肆夏　金奏喧すしく、重潤　朱弦響く」とある。「諸將雲臺」は、後漢の光武帝の天下統一に功績のあった二十八人の大將を、明帝が南宮の雲臺閣に畫かせた故事。

「東去大江」は蘇軾の「念奴嬌・赤壁懐古」に「大江は東去し、浪は淘い盡くす、千古の風流人物」とある。「月在薜蘿」は杜甫の「秋興八首」に「請う看よ　石上藤蘿の月の、已に洲前蘆荻の花に映ずるを」とある。「回也」は孔子の弟子顔回で、「論語」雍也篇に「賢なる哉回也。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人は其の憂に堪えず、回也其の樂を改めず。賢なる哉回也」とある。「兩部蛙吹」は「南史」孔圭傳に「居宅は盛んに山水を營み、几に凭りて獨酌し、傍に雜事無し。門庭の內、草萊剪らず、中に蛙の鳴く有り。或もの之に問いて曰わく、「陳蕃に爲らんと欲する乎」と。圭は笑い答えて曰わく、「我れは此れを以って兩部の鼓吹に當つ。何ぞ必らずしも蕃に效わん」と」とある。「窩中安樂」は宋の哲學者邵雍の「無名公傳」に「寢る所の室は之を安樂窩と謂い、過美を求めず、惟だ冬暖夏涼を求む」とある。

この吉川先生の唱和詞を見た龍氏は、さらに次韻をかさねて「蝶戀花・吉川善之教授は辛丑陽曆除夕に拙詞に和せられしを寄示され、再び前韻を用いて報いと爲す」詞（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九六一年）を作った。

暾出東方聲誼夏　　暾（あさひ）は東方に出で聲は夏に誼（よろ）し
絢采朝霞　　絢采たる朝霞（あさやけ）
簾底金如灑　　簾底　金は灑ぐが如し
瓊樓絳闕都是畫　　瓊樓絳闕は都（すべ）て是れ畫
鯨波待制滔滔者　　鯨波の待制は滔滔たる者
逝者如斯連晝夜　　逝く者は斯くの如し　晝夜に連なる
飢溺爲懷　　飢溺を懷と爲す
大道終行也　　大道は終に行わる也
遠紹旁搜人共化　　遠く紹（つ）ぎ旁（あまね）く搜し　人は共に化す
語皆眞實無虛假　　語は皆な眞實にして虛假無し

「瓊樓絳闕」は、宋の李石の「金馬碧鷄神祠に題す」詩に「蜀山は嵯峨たり九折の外、瓊樓絳闕　風煙に迷う」と

ある。「鯨波待制」は、寶章閣待制の官についた陸游の「好事近」詞十二首の六に「夜半　忽ち奇事に驚き、鯨波と暾日を看る」とある。

「逝者如斯」は「論語」子罕篇に「子は川上に在りて曰わく、逝く者は斯くの如き夫、晝夜を舍かず」とある。「遠紹旁搜」は、宋の劉肅の「片玉集序」に、作者の詞人周邦彥を「旁搜遠紹の才を以って、情を長短句に寄す」と形容するのにもとづく。

そしてあるいはこの前年、龍氏は「浪淘沙」の詞牌にのせて吉川先生に詞を送ったようだが、それは殘っていない。ただそれに一年後に唱和した吉川先生の「浪淘沙・除日に次韻して忍寒詞人の前年に寄する所に答う」詞（「知非續集」昭和三十六年辛丑）が殘っている。

夜月滿空堂　　夜月は空堂に滿ち
手挹淸光　　手ずから淸光を挹む
無端一夢耐星霜　　無端　一夢　星霜に耐う
雲外依依靑鳥信　　雲外に依依たり　靑鳥の信
燭灺槩長　　燭は灺き　槩は長し
鄰笛起山陽　　鄰笛は山陽に起こる
奈隔重洋　　奈かんせん　重洋を隔つ
未能天際識歸航　　未まだ天際に歸航を識る能わず
蓬島秋晴還楚楚　　蓬島の秋晴は還お楚楚たり
蟹舍漁莊　　蟹舍と漁莊と

「靑鳥信」は陳の伏知道の「王寬の爲に婦の義安主に與うる書」に「玉山靑鳥、仙使は通じ難し」とある。

「燭灺」は、宋の趙長卿の「臨江仙・夜坐して更深く、燭は盡き月は明らか、飮興は未まだ闌きず、再び酌み、諸姬に命じて一詞を唱わしむ」詞に「銷窓の風露、燭は灺く月明の時」とある。

また、この第五句の韻律は第二句と同樣「仄仄平平」であるべきだが、第三字の「槩」は仄聲で合わず、平聲の「槩」燭臺の誤りかもしれない。

「鄰笛起山陽」は魏の向秀の「思舊賦」序に「鄰人に笛

を吹く者有り、聲を發すること寥亮たり。曩昔遊宴の好みを追想し、音に感じて嘆く」とある。「天際識歸航」は謝朓の「宣城に之き新林浦に出で板橋に向かう」詩に「天際に歸舟を識り、雲中に江樹を辯ず」とあり、宋の柳永の「玉胡蝶」詞に「雙燕を念うも、遠信に憑り難く、暮天を指すも、空しく歸航を識る」とある。「蟹舍漁莊」は陸游の「長相思」詞に「船蓬を側だて、江風を使い、蟹舍は參差たり漁市の東」とあり、元の倪瓚は「漁莊秋霽圖」の名作を畫いた。

また、舊曆では年末、新曆では一九六二年の初め、龍氏は小川先生が蘇軾自筆の「寒食詩」の寫眞を贈呈されたことに感謝して、「辛丑歲除、小川士解教授の寄贈されし東坡の寒食詩の眞蹟影片を得、二絕句を賦し之に報ゆ」（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九六二年）と題する七絕二首を作った。

蓬蒿釋耒禮金仙　蓬蒿に耒を釋て金仙に禮し
丈室維摩總解禪　丈室の維摩は總べて禪を解す
猶喜爐灰吹得起　猶お喜ぶ　爐灰は吹いて起き得るを
黃州寒食過三年　黃州の寒食　三年を過ぐ

「蓬蒿釋耒」は、蘇軾の「東坡八首」第一首に「廢壘は人の顧りみる無く、頹垣は蓬蒿滿つ」「喟然として耒を釋てて歎く、我が廩は何れの時にか高からん」とある。「金仙」は佛で、宋の徽宗の詔に「佛は改めて大覺金仙と號す」とある。

「爐灰吹得起」は同じく「寒食詩」に「也た塗の窮まるを哭せんと擬す、死灰は吹くも起きず」、「黃州寒食」は同じく「寒食詩」に「我れ黃州に來たりて自り、已に三たびの寒食を過ぐ」とある。

行雲流水感遺編　行雲流水　遺編に感じ
詞翰驚從海外傳　詞翰　海外從り傳わるに驚く
飛動龍蛇誰得髓　飛動せる龍蛇　誰か髓を得たる
宜春帖子自光鮮　春に宜しき帖子は自ずと光鮮たり

「行雲流水」は、蘇軾の「謝民師に答うる書」に「示さるる所の書教及び詩賦雑文は、之を觀ること熟せり。大略は行雲流水の如く、初めより定質無く、但だ常に當に行くべき所に行き、常に止まらざる可からざる所に止まる」とある。

「飛動龍蛇」は、草書の圓轉彎曲するさまを形容し、唐の李白の「草書歌行」に「恍恍として神鬼の驚くを聞く如く、時時に只だ龍蛇の走るを見る」とある。

また、この年の春、上海の新聞「文匯報」で「中國詩人選集」（二集、昭和三七年三月、小川先生の「蘇軾上」から刊行開始）刊行の記事を讀み、龍氏は「壬寅清明の後一日、文匯報は東京の消息を載すらく、岩波書店は方に中國詩人選集の刊行有り、略ぼ稱すらく、中國詩は古今世界文學中の珠玉爲りと稱せられ、彼の邦は千數百年來、卽ち已に光輝に接觸し、特に熱愛を加え、心靈の深き處に透入し、流風餘韻は、彼の邦の人士の情操中に充滿す、と。渺たり兮予が懷い、漫りに絕句を成し、吉川幸次郎・小川環樹兩教授に京都に寄す」（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九六二年）との長題を付した七絕を作った。

情操由來漸漬深　情操は由來　漸やく漬かること深く
內藤一老演唐音　內藤一老は唐音を演ず
蓬窓片羽輝珠璧　蓬窓　片羽　珠璧輝き
縞紵西洲思怎禁　縞紵　西洲　思い怎でか禁えん

「內藤一老演唐音」は、內藤湖南の詩作がまるで唐代詩人のようにすばらしい、ということで、龍氏同時期の作の詩題には、「往に張孟劬（爾田）丈より內藤湖南博士の手書せる一律「空しく羞づ薄宦を半生謀るを、仍お慕う前賢の四品にして休むを。……」を寄贈せらるるを荷う。附註すらく、「丙寅歲除の舊製を錄し、孟劬先生が文を作り馬齒を祝われしに奉謝す」と。詩書雙絕、宛爾として唐賢たり。諸を壁間に懸くるに、恍として開元間の人物に瞻對するが如き也」（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九六三年）とある。

「縞紵西洲」は、湖南の丙寅（大正十五年、一九二六）の

作で、湖南が張爾田に贈り、張爾田から龍氏に寄贈された一律「山荘除夕」（内藤湖南全集）第十四巻「湖南詩存」）に「三世の書香　乙部を研め、一時の縞紵　西洲に遍し」とある。「縞紵」は深い交友で、「春秋左氏傳」襄公二十九年に「（吳公子札は）鄭に聘かれ、子產に見うに、舊相識の如く、之に縞帶を與え、子產は紵衣を獻ず」とある。「西洲」は江南一帯をいい、南朝の「西洲曲」に「西洲は何處にか在る、兩槳　橋頭の渡」とあるが、ここは湖南の訪れた中國各地をいうだろう。

この翌一九六三年、吉川先生から贈られた「宋詩概說」（中國詩人選集二集、昭和三七年十月刊）の答禮として、龍氏は「吉川善之教授は著わす所の宋詩概論を寄示され、漫りに小詩を拈りて答謝し、兼ねて小川士解教授を懷う」七絕三首（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九六三年）を作った。

陳黃勝義久成塵　陳・黃の勝義は久しく塵と成り
誰數江西社裏人　誰か江西社裏の人を數えん
切玉寶刀成永憶　玉を切る寶刀は永憶と成る
海天遙契醉翁眞　海天　遙かに契る　醉翁の眞に

「陳黃」は、江西詩派の一祖三宗と稱された唐の杜甫、宋の黃庭堅・陳師道・陳與義のうち三宗をいおう。

第三・四句は「醉翁亭の記」を書き、「醉翁の意は酒に在らず、山水の間に在る也」と述べた「醉翁」宋の歐陽修の「日本刀の歌」にもとづく。「宋詩概說」序章「宋詩の性質」で吉川先生は全詩を引いて「宋詩の敍述性」を詳說されるが、その冒頭に「昆夷は道遠くして復た通せず、世には玉を切ると傳うるも誰か能く窮らん。寶刀は近ごろ日本國より出で、越賈は之を滄海の東に得たり」とある。ここは吉川先生を「眞」の體得者歐陽修になぞらえる。

果知詞派有西江　果して知る　詞派は西江有るを
雲起軒前氣未降　雲起軒前　氣は未まだ降らず
禹域正開新曆日　禹域は正に開く　新曆日
何當把盞聽高腔　何當か盞を把りて高腔を聽かん

第一句には「彊村先生は文道希の雲起軒詞に題す」と

の自注あり。

李唐趙宋竝昌詩　李唐と趙宋と竝びに詩昌んなり
二妙殷勤爲護持　二妙は殷勤に護持を爲す
願得普同聲氣感　願わくは普同く聲氣感ずるを得て
東風融暖粲瓊枝　東風融暖にして瓊枝粲たるを

「二妙」は南宋の趙師秀が「二妙集」を編んだ唐の詩人賈島と姚合。ここは「唐詩概説」を書かれた小川先生と「宋詩概説」を書かれた吉川先生をいうか。

さらにこの年の秋、龍氏は「癸卯中秋、善之・士解兩教授を懷う有り」（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九六三年）を作った。

夏秋常臥病　夏秋　常に病いに臥し
矯首睇飛鴻　首を矯げて飛鴻を睇る
時有新編至　時に新編の至る有り
相望皎月中　相い望む　皎月の中
度人心轉赤　人を度し心は轉た赤く
流影鏡懸空　影を流し鏡のごとく空に懸かる
未覺蓬山遠　未まだ蓬山の遠きを覺えず
游氛尙幾重　游氛は尙お幾重

第二句は、魏の嵇康の「秀才の軍に入るに贈る」詩の「目は歸鴻を送り、手は五弦を揮う」を意識するかもしれない。第五・六句は、その「心」が「赤」く、月光を放つ「鏡」のような中秋の名月をうたうか。「流影」は、唐の齊浣の「長門怨」詩に「心を將って明月に托し、影を流して君が懷ろに入る」とある。

第七・八句は、唐の李商隱の「無題」詩に「劉郎は已に恨む蓬山の遠きを、更に蓬山を隔つ一萬重」とあるのを裏返す。「游氛」は流動する雲霧で、晉の潘岳の「秋興の賦」に「游氛は朝に興こり、槁葉は夕に殞つ」、陶淵明の「郭主簿に和す」詩に「露は凝りて游氛無く、天は高くして風景澈し」とある。

この三年後、舊暦では年末、新暦では一九六六年の初め、

文化大革命が勃發し、龍氏も恨みを飲んで逝去することになるこの年の初めに、龍氏は予感したかのように今關氏、吉川・小川の兩先生、神田喜一郎氏にあてた、日本人向けには最後となる「乙巳歳晏、懐いを日本の諸吟侶に寄す」七絶三首（「歌詞集」「葵傾室吟稿」一九六六年）を作った。そのうちの二首をあげよう。まず「今關天彭詩老」と注する第一首。

珠玉聯翩輝海東　珠玉は聯翩として海東に輝き
天留一老扇唐風　天は一老を留めて唐風を扇がしむ
湖南博士原先覺　湖南博士は原より先覺
促膝深談意未窮　膝を促りて深談するも意は未まだ窮まらず

第二句は、さきの「壬寅清明の後一日云云」詩の「內藤一老　唐音を演ず」と同じく、まず內藤湖南をいおうが、同時に今關氏も含むだろう。

つぎは「吉川善之・小川士解兩教授」と注する第二首。

轉親風雅協壎篪　轉た風雅に親しみ壎篪に協う
杯酒論文□會期　杯酒もて文を論ずるは會期……
料得遠游歸去後　料り得たり　遠游より歸去せる後
清閒顧曲顯雄姿　清閒に曲を顧りみて雄姿を顯わすを

「壎篪」は、さきの龍氏一九四一年「八聲甘州」詞に「壎篪の奏を聽き、華顚を忘却す」とある。「遠遊」は、あるいは一九六五年の小川先生のアメリカ・ヨーロッパ旅行をいうのかもしれない。

「顧曲」も「雄姿」も吳の周瑜の故事。「三國志」吳書「周瑜傳」に「瑜は少くして意に音樂に精しく、三爵の後と雖も、其の闕誤有れば、瑜は必らず之を知り、之を知れば必らず顧りみる。故に時に人の謠いて「曲に誤り有れば、周郎は顧りみる」と曰う有り」とあり、蘇軾の「念奴嬌・赤壁懐古」詞に「遙かに想う公瑾當年、小喬初めて嫁ぎ了り、雄姿英發す」とある。

「杯酒論文」は杜甫の「春日　李白を憶う」詩に「何れ

の時にか一杯の酒、重ねて與(とも)に細かに文を論ぜん」とある。この句の第五字は不明だが、李白と杜甫のごとく、吉川・小川兩先生と「杯酒論文」の「期」をもつことを期待したろう龍氏の願いは、かなえられることは終になかった。この年の暮れ、勤務先の上海音樂學院の紅衛兵によって書籍・文物のすべてを奪われた龍氏は、そのショックにより、一一月一八日に心筋梗塞の發作を起し、死去したのである。六十五歳だった。